

歴代「音の匠」紹介

■ 森 芳久 日本オーディオ協会諮問委員

「音の日」を記念して顕彰

1877年12月6日はトーマス・エジソン(Thomas Alva Edison、1847年～1931年)が世界初、音の記録・再生可能な装置、錫箔円筒式蓄音機『フォノグラフ』を発明した日であり、まさにオーディオの誕生日ともいう記念すべき日である。

1994年、日本オーディオ協会は関係業界団体である日本レコード協会、日本音楽スタジオ協会などと手を携え、音と音楽文化の重要性を広く認識してもらうと共に、オーディオおよび音楽文化・産業の一層の発展に寄与することを目的とし、この由緒ある12月6日を「音の日」記念日として制定し、関係団体は丸となり啓発活動や特別行事などを行ってきた。

1996年以降はこの「音の日」の定例行事として、音を通じて技術や文化に多大な貢献をされた方々を「音の匠」として顕彰し、オーディオ・音楽・放送業界だけでなく広く一般の方々に、その素晴らしい音の世界を認識してもらうように活動を続けてきている。

ここでは、第1回より第16回までの「音の匠」たちを、改めてご紹介するものである。

■筆者プロフィール



森 芳久 (もり よしひさ)
略歴

1964年東京電機大学電機通信工学科卒。日本グラモフォン、品川無線、NHK技術研究所(品川無線から出向)、ソニーなどでカートリッジの研究開発・設計に携わる。1990年からソニー株式会社オーディオ事業本部商品企画室長、技術広報室長、SA-CDビジネスセンター担当部長などを歴

任。2002年から2011年まで東京藝術大学非常勤講師を務める。現在、日本オーディオ協会諮問委員、「音の日」実行委員長。

【第1回】1996年度「音の匠」

初回の「音の匠」は、JR(日本旅客鉄道株式会社)から選定した。これは、日本オーディオ協会を創立した時に、中島健蔵氏(初代会長)と井深大氏(第二代会長)が、当時の国鉄駅構内放送設備(PA: Public Address)の音質が海外の鉄道のそれに追いつくようにとの願いも込めて設立したというエピソードによるものである。

顕彰者(1名、1団体)

●針谷 照(はりがや あきら)氏

路線の不具合を小ハンマーによる打音で判断し、長年にわたり鉄道の運行の安全に努めた。

●西日本旅客鉄道株式会社 技術開発推進部殿

低騒音パンタグラフの開発によって、市街地における新幹線の高速度運転を可能とした。

顕彰者プロフィール(順不同、1996年現在)

■針谷 照氏(東日本旅客鉄道株式会社 上野保線区施設技術主任)

1964年、東京鉄道管理局上野保線区線路工手として就職以来、30余年の長きにわたり保線を通じて列車の安全運行に貢献してきた。



今日では、レールの傷は超音波を利用したレール探傷車で対処しているが、導入以前は小ハンマーによる打音で判定を行っていた。現在でも探傷車の運行がない線路に対しては同様の方法で保線業務を実施している。またレール間をつなぐ継目板のボルト緩みも、ハンマー等による「音響」で発見し、締め直しを行っている。同氏は、

この面で優れた技術をもつ第一人者であり、その技術を指導・伝承にも務めている。

■西日本旅客鉄道株式会社技術開発推進部殿
(代表者 技術開発推進部長 櫻井 紘一氏)

超高速新幹線にとって環境保全の面で大きな問題となるのが、パンタグラフから発生する騒音である。この問題を解決するために、



同部では4年間にわたる低騒音風洞実験や超指向性マイクによる音源解析等を駆使し低騒音化のための設計・改良を重ね、低騒音翼型パンタグラフを完成させた。その結果、環境基準の極めて厳しい日本で、時速300kmを超える新幹線運行を可能にした。

【第2回】1997年度「音の匠」

“風”をテーマに風鈴作りの匠たちを顕彰した。

顕彰者(3名、順不同)

●篠原 儀治(しのはら よしはる)氏

江戸風鈴の技法に独自の工夫を加えながら伝承している。

●前田 仁(まえだ ひとし)氏

讃岐特産の石「サヌカイト」で楽器や風鈴を製作し、音の文化の向上に努めている。

●明珍 宗理(みょうちん むねみち)氏

鍛冶の技法による伝統工芸を守り、独自の火箸風鈴を考案する。

顕彰者プロフィール(順不同、1997年現在)

■篠原 儀治氏(篠原風鈴本舗)

篠原風鈴本舗は東京都江戸川区南篠崎にあり、創業は大正4年(1915年)。当代の儀治氏は二代目。吹きガラスによる風鈴製造工房は、昭和30年代までは東京都内を含め8~9軒ほどあったが、現在では篠原風鈴本舗1軒となった。江戸風鈴は昔ながらの手作りで、ガラス管の

先に種ガラスをつけてまず小さい球を作る。この球にさらに種を付けて、ガラス管を斜めに持ち上げる「宙吹き法」によって作り上げたのち、ヤットコで管から切りおとし、後加工を経て本体ができ、その後絵付けなどを行い完成される。江戸風鈴の独自の音色は、形状の工夫や肉厚に加え、風に揺られてガラス棒が本体に当たる部分のギザギザなどに大きく関係する。



■前田 仁氏(教育学博士)

昭和4年(1929年)香川県生まれの教育学博士。本業の会社経営のほかにサヌカイト楽器の創始者として音楽教育の分野でもボラン



ティア活動を続ける。サヌカイト(別名讃岐石)は1,350万年前に地殻変動によって噴出した溶岩が固まってできた非常に硬い花崗岩の一種。これを2cm角の棒状にして互いを叩くと、独自の非常に澄んだ音を発する。氏はこの石の音に驚嘆するとともに感銘を覚え、中国の黄河文明期に生まれたといわれる石の楽器(磬)その他を研究し独自の石琴を考案、1981年にはサヌカイト琴を完成。1986年、武蔵野音楽大学における演奏以降、内外各地でコンサートを開催。ツトム・ヤマシタ演奏による「太陽の儀礼Ⅲ——神々のささやき」、「なつかしき未来」などのCDも発売。また、サヌカイトの風鈴も製作している。

■明珍 宗理氏(明珍本舗)

明珍家は平安の頃から代々甲冑師として武具を作り、昭和17年(1942年)生まれの宗理氏は、平成4年(1992年)、第52代目を



襲名、現在姫路城の近くに工房を構える。22代目の頃、天皇からその^{よらい くつわ}鑑・響が発する音が「朗々とし、明白にして玉のように珍器なり」と讃えられ、明珍の名を拝命。明治維新以降は火箸の製作を手がけ、火箸が打ち合って発する澄み切った音は鈴虫にも伍すると評される。火箸風鈴は昭和40年（1965年）に宗理氏によって考案され、「つくし」「瓦釘」「つづみ」「わらび」「槌目付」型など、各種形状の組み合わせで構成される。短いものは高く澄んだ音、長いものは余韻と複雑なスペクトルをもつ音を発する明珍独特のもの。NHKで放映された『街道をゆく』の音楽は富田勲氏の作曲になるが、ここにも明珍火箸の音色が使われている。

【第3回】1998年度「音の匠」

“水”をキーワードに、日本で初めてガラスハーブを製作した佐々木硝子株式会社、その誕生に際し各種のアドバイスとその普及に努めた演奏家、高橋美智子氏を「音の匠」に選定した。

顕彰者（1名、1社）

●高橋 美智子（たかはし みちこ）氏

伝統あるガラスの楽器・ガラスハーブの演奏活動。

●佐々木硝子株式会社殿

ガラスハーブの製造。

顕彰者プロフィール（順不同、1998年現在）

■高橋 美智子氏（ガラスハーブ奏者）

東京芸術大学を卒業後、1973年オランダ・ガウデアムス国際現代音楽コンクールで日本人初の第1位を獲得。同時に国際現代音楽賞を受賞。1981年に佐々木信次氏（佐々木硝子株式会社）と出会ったことから、日本人初のガラスハーブ奏者として演奏法を開拓し、CD『クリスタル・ガラスハーブ』で高い評価を得る。『ガラスハーブモーツァルト』



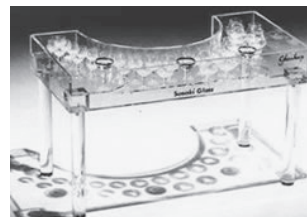
1981年に佐々木信次氏（佐々木硝子株式会社）と出会ったことから、日本人初のガラスハーブ奏者として演奏法を開拓し、CD『クリスタル・ガラスハーブ』で高い評価を得る。『ガラスハーブモーツァルト』

（キングレコードKICC-118）や『鳥の歌』（ソニーミュージックSRCR1765）などでガラスハーブの音と演奏を聴くことができる。

■佐々木硝子株式会社殿

（現、東洋佐々木ガラス株式会社）

ガラスメーカーとして知られる同社は、クリスタルガラスによる各種の楽器開発に意欲的で、ガラスハーブの魅力伝えるべく、熱心に開発をしたのが無



（佐々木硝子社製のガラスハーブ）

類の音楽好きの佐々木信次氏を始めとする佐々木硝子の技術陣。音階は水を入れて決めるのではなく、ガラスの大きさと底部を削る独自の手法で調整し、経験を積んだ名人たちが1年をかけて製作した。ガラスはクリスタルガラスが使われ、形状としてはチューリップ型のいわゆるブランデーグラス状のもので、奏法は指先を水で濡らせて行う（2002年4月に、東洋ガラス株式会社ハウスウェア部門と佐々木硝子株式会社は統合、東洋佐々木ガラス株式会社となった）。

【第4回】1999年度「音の匠」

ピアノの名演奏を陰で支えるピアノの調律師にスポットを当て、中でもスタインウェイのピアノの調律で演奏者から信頼の厚い松下和生氏を「音の匠」に選定した。

顕彰者（1名）

●松下 和生（まつした かずお）氏

永年に亘り、卓越したピアノ調律技術と感性で名演奏家を支えてきた業績を讃えて。

顕彰者プロフィール（1999年現在）

■松下 和生氏

（社団法人日本ピアノ調律師協会会員）

1947年熊本県生まれ。1966年に福岡の松本ピアノに

調律見習として入社し、調律の仕事をスタート。その後杵漕ピアノ、松尾楽器商会などを経て1998年に独立。以降フリーの調律師として幅広く活躍。調律は単に音階を正確にセットすることに止まらず、演奏者の要求に応じて微妙な音色に仕立てるといった高度な技が要求される。



【第5回】2000年度「音の匠」

備長炭を楽器として開発しその普及と備長炭の告知活動に努めている清水虔氏を「音の匠」に選定した。

顕彰者（1名）

●清水 虔（しみず めぐむ）氏

紀州備長炭によるビブラフォンを製作し、その普及促進に努める。

顕彰者プロフィール（2000年現在）

■清水 虔氏（びんてふ友の會名誉会長）

1929年生まれ、兵庫県姫路在住。1950年の英語教諭を振り出しに教頭・校長を務める傍ら、1989年に備長炭の素晴らしい特性を多くの方々に認識してもらう目的で「びんてふ友の會」を結成。備長炭の金属にも通じる独特



2000年12月6日「音の日」の演奏風景
（右）清水氏、（左）備長炭ビブラフォンを演奏する山口公子氏（びんてふ友の會名誉会長）

の澄んだ独特の音色に着目、楽器として生かす道を考察、「炭琴」の試作を始めた。天然の素材故の多くの課題を克服して試作品を完成させ、優れた楽器としての完成度をさらに上げるためヤマハに製作協力を依頼、4年余の歳月をかけ、1999年夏に備長炭のビブラフォンとして完成させた。以来、氏はこの備長炭のビブラフォンの普及促進活動に邁進している。

【第6回】2001年度「音の匠」

2001年は、世界最初の電子楽器ともいえる「テルミン」の紹介や普及活動に務められた竹内正美氏を「音の匠」に選定した。テルミンは、ソ連の物理学者レフ・テルミン（Lev Sergeyevich Termen、1896年～1993年）が発明した。

顕彰者（1名）

●竹内 正美（たけうち まさみ）氏

電子楽器「テルミン」の演奏普及活動に務める。

顕彰者プロフィール（2001年現在）

■竹内 正美氏（テルミン奏者）

1967年埼玉県生まれ。大阪芸術大学音楽学科音楽工学専攻卒業後、音楽ホールでの録音技師を経て、テルミンの演奏を修得すべく1993年に渡露。モスクワで、発明者テル



テルミン演奏中の竹内正美氏。
2001年12月6日「音の日」

ミンの遠縁でテルミン本人から直接指導を受けた、リディア・カヴィナ（Lydia Kavina）女史に師事。帰国後は各地で演奏会や単行本「テルミン——エーテル音楽と20世紀を生きた男」（岳陽舎刊）の出版および日本人初のテルミンによるCD『タイムスリップス アウエイ』（NEXTレコード NKCD-0010）出版などを通じ、テルミンが奏でる音楽の魅力を伝えるため、積極的な活動を展開、多くのファンや後継者が育っている。

【第7回】2002年度「音の匠」

2002年は、CD発売20周年を記念し、CD開発や改良に功績のあった20名の方々を「音の匠」として顕彰した。CD開発に貢献された方々は多数おられるが、今回は関係業界より推薦された方々の中から「音の日実行委員会」で下記20名の方々を選定した（写真およびプロフィールは省略）。

顕彰者 (20名)

部 門	氏 名	所 属 (2002年現在)
ソフト制作	服部 文雄氏	ビクターエンタテインメント(株) ソフト技術部
	馬場 哲夫氏	(株)ソニー・ミュージックコミュニケーションズ 録音技術本部
ディスク製造	梅沢 清氏	コロムビアデジタルメディア(株) 品質管理部
	東 孝一氏	松下電器産業(株) DD社CRT事業グループ
	柿沼 敬二氏	東芝EMI(株) 御殿場工場技術部
プレーヤーと デバイス開発	成瀬 庸介氏	元ソニー(株)
	鶴島 克明氏	ソニー(株)常務 SA-CDビジネスセンター
	木目 健治朗氏	三菱電機(株) リビング・デジタルメディア事業本部
	林 英昭氏	元日本コロムビア(株)
	鈴木 雅臣氏	アキュフェーズ(株) 技術部
	池戸 勇二氏	パイオニア(株) 品質技術部
	西川 和男氏	パイオニア(株) 生産戦略グループ
	桑岡 俊治氏	日本ビクター(株) AVM商品開発研究所
	阿部 忠氏	松下電器産業(株) マルチメディア開発センター
	田中 伸一氏	松下電器産業(株) メディア制御システム開発センター
	安田 博氏	松下電器産業(株) AVC社AVテクノロジーセンター
	フォーマットと システム開発	Mr. Joop Sinjou
Dr. Jacques Heemskerk		Philips Intellectual Property and Standards
土井 利忠氏		ソニー(株)上席常務 DCラボラトリー
小川 博司氏		ソニー(株) BD開発部門

【第8回】2003年度「音の匠」

2003年は、日本でテレビ放送開始50年、またデジタルラジオ放送や地上デジタル放送開始の年でもあり、放送番組の音響デザイン、また効果音制作で活躍された方々の中から「音の匠」を選定した。

顕彰者 (3名、順不同)

放送ドラマの効果音制作ならび放送における音響デザインに貢献。

- 玉井 和雄 (たまい かずお) 氏
- 今井 裕 (いまい ゆたか) 氏
- 久保 光男 (くぼ みつお) 氏

顕彰者のプロフィール (順不同、2003年現在)

■玉井 和雄氏

(株式会社文化放送編成局、元同局制作部次長)

1932年生まれ。1954年株式会社文化放送に音響効果要員として入社。日常のドラマ番組制作のほか、芸術祭や民放祭の参加作品などの特別番組制作や、CM

(Commercial Message) の効果音制作で数々の賞を受賞した業界の重鎮。1963年に2時間ドラマ『堀江謙一・マーメイド号』の効果音を担当、大半が太平洋上という設定で音造りに苦労する。1965年放送の2時間ドラマ『戦艦大和』は心理的な効果音を含め、ダイナミックかつ象徴的な表現で壮大な鎮魂譜の作品。1970年の大阪万博では住友童話館のすべての効果音をプロデュースした。1976年に『ナマロクの本』、78年に『生録プロフェッショナル』を著作刊行。文化放送を定年退職後も業務契約を結び活躍中。放送批評懇談会会員。



■今井 裕氏 (日本放送協会放送技術局制作技術センター ドラマ番組技術音響制作副部長)

1951年生まれ。1970年、NHK音響効果部入社。同時期に劇団を設立し、舞台にも傾倒。劇団民芸などで舞台音響を学び、現在は日本舞台音響家協会理事。NHKでは『シルクロード』やドラマなどジャンルを問わず音響デザインの現場を約30年間勤



め、現在は行政職として後任の指導に当たっている。映画においては、小栗公平監督の『泥の河』から黒澤明監督の最終作『まあだだよ』など、多数映画作品のフォーリーに参加。海外では、カリフォルニア州の映画スタジオ、スカイウォーカーランチ (Skywalker Ranch) でハイビジョン番組『曼荼羅』の音響をアカデミー賞受賞のゲイリー・ライドストロム (Gary Rydstrom) と組んで制作。その他の活動として、ラフォーレ原宿で『三感迷路』を発表し、施設や街、イベント会場等の立体音響作品を手がけている。また、作家C. W. ニコル (Clive Williams Nicol) との出会いがきっかけで自然に興味をもち、屋久島などで樹木の鼓動を聴き、独自の「音の顕微鏡」という手法を使い、波動を音として体感する研究も行っている。優れた作品の制作によって、朝日賞、

ギャラクシー賞、文化庁芸術祭・大賞、イタリア賞など多くを受賞。

■久保 光男氏 (日本放送協会放送技術局制作技術センター 音響デザイン副部長)

1952年生まれ。NHKに入局後、音響効果に配属され、新人研修の時にラジオの学校放送『みんなの図書館』の『怪盗ルパン』でルパンが警官に追われる足音を演じたのが最初の仕事。人形劇・アニメ・社会科番組など教育系の番組を担当し、



1981年、NHK初のステレオテレビドラマ『星の牧場』制作に参加。最も印象に残る作品は音が主役のニューウエーブドラマ『音・静の海に眠れ』という。戦争の後遺症に悩む老人と孫娘静の物語だが、老人の心を癒す音を自分の体験に重ね合わせてハーモニカの音として完成させた。この作品はプラハの国際テレビ祭の金賞を、また放送文化基金賞の音響効果賞を受賞した。主たる担当作品は、金曜時代劇『風神の門』『腕におぼえあり』、大河ドラマ『春の波涛』『翔ぶが如く』シリーズ、『にっぽん水紀行』『歴史ドキュメント』など多数。

【第9回】2004年度「音の匠」

アテネ・オリンピック開催年にちなみ、スポーツ分野で音の技術と文化に貢献した方々の中から選定した。

顕彰者 (3名、順不同)

- 野田 員弘 (のだ かずひろ) 氏
ワールドカップサッカーなど国際競技会で公式採用されたホイッスルの開発・製作。
- 居石 浩己 (すえいし ひろみ) 氏
スポーツ番組中継における音声制作
- 井上 哲 (いのうえ さとし) 氏
スポーツ番組中継におけるサラウンド音声制作と制作技術の啓発。

頭彰者プロフィール（順不同、2004年現在）

■野田 員弘氏（株式会社野田鶴声社代表取締役）

1930年生まれ。1919年、先代・野田義定氏がハーモニカ等の北米向け輸出専門メーカーとして東京・台東区で創業。大戦中工場を全焼、現在の葛飾区亀有に移転。1968年からホイッスルの製造を開始。1971年以降、欧州・中近東・中南米に市場を広げ、世界45カ国に1,500万個以上を輸出。音色・品質共に世界No.1のホイッスルとしてスポーツ・軍・警備・防災・護身用等で広く採用されている。スポーツ界向けには、サッカー用ホイッスルとしてワールドカップ1982年スペイン大会、1986年メキシコ大会に公式採用された。1993年に日本サッカー審判協会の推奨品に認定され、ワールドカップ1998年フランス大会では岡田正義審判員が使用した。ラグビー、バレーボール、ホッケー等の審判にも使用されている。高くて澄んだ響きを実現するには、まずボディが硬質であることが不可欠。真鍮素材をベースに、厚手のメッキを3層施した4層構造としている。より遠く、より大きな音で吹き手の意志を伝えるために、構造に創意工夫を重ね、手作業で組み上げ密閉度の高い構造を実現している。



■居石 浩己氏（日本放送協会放送技術局報道技術センター 中継・回線）

1962年生まれ。1980年NHKに入局。1990年から、スポーツのサウンド番組やオリンピック等の海外イベントを手がける。ハイビジョンの大相撲、選抜高校野球、鈴鹿8時間耐久レース等のサウンド音声制作を担当。1992年のバルセロナオリンピックではハイビジョンクルー音声として開閉式、柔道、陸上を担当し、1994年のリレハンメルオリンピックではハイビジョン音声チーフとなる。1998年の長



野オリンピックでは、スピードスケート、アイスホッケー、フィギュアスケート競技など、水中マイクを使用した滑走音集音を実現した。2000年シドニー、2002年ソルトレークでのチーフ、TD（Technical Director）の経験を経て、2004年アテネではオリンピック史上初になるホスト制作のサウンド音声を成功させた。また、サウンド自動ミキシング装置を開発し、臨場感あふれるサウンド放送に使用。2002年ワールドカップサッカーでは海外（ソウル）からの初の開幕戦5.1サウンド生放送を実現した。

■井上 哲氏（テレビ朝日映像株式会社技術局中継グループ テクニカルディレクター）

1971年生まれ。1994年株式会社全国朝日放送入社。以来スタジオ、中継などの音声制作業務を担当し、2000年から現所属。BSデジタル放送の開始をきっかけに5.1チャンネルサウンド放送の実現に奔走。2001年秋、格闘技中継番組で日本初の5.1チャンネルサウンドスポーツ中継を実現。翌年、プロ野球日本シリーズ中継で民放初の5.1チャンネルサウンド生放送を行った。以来スポーツ、音楽を中心に、さまざまなジャンルで5.1チャンネルサウンド番組を企画、制作している。日本音響学会や映像情報メディア学会などで5.1チャンネルサウンド関連の研究発表を公表し、専門誌にも多数執筆し、放送番組におけるサウンド技術の普及と向上に努めている。2004年、日本映画テレビ技術協会・柴田賞を受賞他、数々の受賞をしている。



【第10回】2005年度「音の匠」

第10回を迎えた「音の匠」は、サウンドサウンドの発展にソフトとハードの垣根を越えて貢献した方々の中から3名を選定した。また、録音制作および車載システム開発においてサウンド音楽普及の先導的役割を果たした功績を讃え、米国の録音・制

作技術者のエリオット・シャイナー (Elliot Scheiner) 氏に「音の匠特別賞」を授与した。

顕彰者 (3名、順不同)

●内沼 映二 (うちぬま えいじ) 氏

ステレオからサラウンド音楽にいたる録音技術と作品制作の功績に対して。

●沢口 真生 (さわぐち まさき) 氏

ステレオからサラウンドにいたる放送番組制作技術と番組制作の功績に対して。

●西尾 文孝 (にしお あやたか) 氏

ステレオからサラウンドにいたる再生システムの音質向上の功績に対して。

「音の匠特別賞」

●エリオット・シャイナー (Elliot Scheiner) 氏

録音制作におけるサラウンド音楽普及の先導的役割を果たした功績に対して。



顕彰式にて (鹿井JAS会長、内沼氏、沢口氏、西尾氏、シャイナー氏、電波新聞社平山社長)

顕彰者プロフィール (順不同、2005年現在)

■内沼 映二氏 (株式会社ミキサーズ・ラボ代表取締役社長 レコーディングエンジニア)

1944年生まれ。レコード会社「テイチク興業(株)」日本ビクター(株)/RVC」の録音部を経て1979年、日音スタジオを本拠地として、レコーディングエンジニアの集団である「(株)ミキサーズ・ラボ」を設立。1990年に自社運

営スタジオとして「ウエストサイド」を設立。続いて「ワーナーミュージック・レコーディングスタジオ」、CDマスタリング&DVDオーサリングセクションとして「ワーナーミュージック・マスタリング」を設立し、現在に至る。レコーディングエンジニアとして最新技術に積極的に取り組み、ステレオからサラウンドの録音制作に至る40年のキャリアをもち、ジャンルを問わず多くのアーティストのレコーディングに参加。最近では映画のサウンドトラック等におけるサラウンドミックスも手掛け、2004年には5.1チャンネル・サラウンドチェック・ディスク「CHECKING DVD BY MUSIC」をプロデュースしている。1994年から98年まで社団法人日本音楽スタジオ協会会長を務め業界の発展と録音技術者の育成に尽くしている。1994年「新日本紀行 富田勲の音楽“新平家物語”」の制作で第1回日本プロ音楽録音賞の優秀賞など受賞多数。

■沢口 真生氏 (パイオニア株式会社技術開発本部顧問、Fellow AES/IBS)

1948年生まれ。1971年NHK入局。1987年、音声チューフエンジニア、1999年音響デザイン部長、2003年制作技術センター長などの要職を歴任。2005年、パイオニア株式会社 技術開発本部顧問就任。1985年以降、デジタル時代のサラウンド音声スタジオ設備設計とソフト開発に従事。1991年からAES (Audio Engineering Society : オーディオ技術者協会) を中心としてサラウンド制作の技術発表やワークショップ等を担当。日本オーディオ協会では、AA (Advanced Audio) 懇話会マルチチャンネルグループ主査として次世代オーディオの方向付けに貢献。92~96年にかけてHD-TV MSSG研究会でハイビジョン時代のサラウンド制作に必要な音響設計ガイドラインを策定。その成果はAESにおけるサラウンド制作ガイドラインに反映された。近年はInter BEE (放送機器展) International Symposiumの企画運営、JPPA AWARDS (日本ポストプロダクション協会) ミキシング部門審査員やAES 技術委員会スタジオセクションの共同議長などを務める。また、サラウンド制作普及のために「サラウンド寺子屋塾」を主宰。2002年AESからサラウンド音響への貢献でフェロウシップ賞、2003年に

はヨーロッパIBSからフェローを受賞。2004年には「放送におけるサラウンド制作」の論文でEBU (European Broadcasting Union: 欧州放送連合) 最優秀論文賞を受賞。「サラウンド制作ハンドブック」(兼六館) など著書多数。

■西尾 文孝氏 (ソニー株式会社ビデオ事業本部兼オーディオ事業本部シニアエンジニア)

1961年生まれ。1986年ソニー株式会社入社。1988年、Sony Classicalレーベル向けの20ビット・レコーダ用A-D変換器の開発を担当。以降、高精度A-D/D-A変換器設計やCDの高音質化技術「Super Bit Mapping」の開発等、音楽制作サイドでの音質向上技術の開発と普及に携わる。1994年から1ビット $\Delta\Sigma$ 変調信号の直接記録・編集・再生技術(後の「DSD: Direct Stream Digital」)の開発を開始、1996年にDSD編集処理LSIを開発、プロトタイプのDSDレコーダとDSD編集機(米Sonic Solutions社と共同開発)の試作を通じて、DSD録音の実用化と基礎的なスーパーオーディオCD(SA-CD)用マスター作成環境の構築を行う。2000年以降は、SA-CDの普及活動に従事し、各社DSD対応レコーダや編集機の商品化に関与しDSD方式の普及定着に努めた。2004年からビデオ事業本部オプティカルシステム開発部門信号処理開発部兼オーディオ事業本部開発部シニアエンジニアとしてDSD技術の応用拡張に努めている。

■エリオット・シャイナー氏 (録音エンジニア/音楽プロデューサー)

1947年生まれ。米国コネティカット州レディングに5.1チャンネルサラウンドスタジオをもつ。ニューヨークのA&R Recording社でPhil Ramone氏のアシスタントとして出発。1973年、フリーのエンジニア/プロデューサーとして独立。パークッション演奏家としても活動したがスタジオ業務に戻り、イーグルス、B.Bキング、エアロスミス、エリック・クラプトン、クイーン、スティングなど多くの優秀なアーティストと仕事をし、また映画「ゴッドファーザー」等のサウンドトラック制作に参加、日本のアーティストでは矢沢永吉、南佳孝、山本達彦との仕事もある。常に最先端技術に挑戦し、DVD

オーディオ、DVDビデオ、デュアルディスクのためのサラウンドサウンド作品を制作、イーグルスの「ホテルカリフォルニア」、クイーンの「A Night at the Opera」などのサラウンド音楽作品でステレオを超えたアーティストの創造性を引き出し、多くの音楽ファンの支持を得る。車載機器分野では「アキュラTL」(本田技研工業)に搭載の「ELSサラウンドシステム」などを開発、車室空間におけるDVDオーディオとサラウンドサウンドの普及に貢献。グラミー賞受賞5回。Surround Pioneer Award 2002受賞、2004年度The Technical Excellence & Creativity Awardほか多数を受賞。

【第11回】2006年「音の匠」

2006年は、小鳥たちと会話ができるエッセイスト、三宮麻由子氏を顕彰した。

顕彰者 (1名)

●三宮 麻由子 (さんのみや まゆこ) 氏

全盲ながら聴覚の素晴らしさを説くと共に、人々に勇気を与える活動に対して。

顕彰者プロフィール (2006年現在)

■三宮 麻由子氏 (エッセイスト)

東京生まれ。4歳で病気によって視力を失う。上智大学フランス文学科卒業。同大学院博士前期課程修了。外資系通信社勤務とともにエッセイストとしても活躍。その優れた聴覚を生かし、鳥の鳴き声で時刻や天候の移



2006年「音の日」記念講演会での三宮氏(右)、対談相手はジャーナリスト小林和男氏(左)

り変わりを判別、鳥たちとのコミュニケーションを通して野鳥の生態研究にも貢献。『鳥が教えてくれた空』(NHK出版、1998年)で第2回NHK学園「自分史文学賞」大賞、『そっと耳をすませば』(NHK出版、2000年)で第49回日本エッセイストクラブ賞を受賞。視覚障害者の文化に貢献した人物に送られる「第2回サフラン賞」受賞(2005年)。その他、多くの雑誌等に執筆、テレビ・ラジオ出演や講演活動などでも活躍している。

【第12回】2007年度「音の匠」

2007年は、優れた聴覚と音響技術を用いて漏水の発見に努め、水資源の有効活用と人々の暮らしに貢献をされている東京都水道局の漏水調査の専門職員の方々を顕彰した。

顕彰者

●東京都水道局7部門殿

- ・ 東京都水道局給水部給水課
(職場代表者：森田 健次氏)
- ・ 中央支所給水課
(職場代表者：越坂部 信男氏、氏井 行雄氏)
- ・ 東部第一支所給水課
(職場代表者：古川 敏雄氏、西生 智憲氏)
- ・ 東部第二支所給水課



東京都水道局給水課職場代表者
電波新聞社平山社長 (前列左)、日本オーディオ協会鹿井
会長 (前列右)

- (職場代表者：大畠 秀男氏、軽部 晴久氏)
- ・ 西部支所給水課
(職場代表者：守嶋 靖之氏、齋藤 純一氏)
- ・ 南部第一支所給水課
(職場代表者：高橋 寿氏、伊東 松見氏)
- ・ 南部第二支所給水課
(職場代表者：田中 功之氏、門馬 光成氏)
- ・ 北部支所給水課
(職場代表者：安田 幸作氏、加藤 真氏)

■漏水防止の仕事

検出器、増幅器、ヘッドフォンで構成される高感度検知器で、地表面から漏水音を探し出す(音聴法)。作業中は全神経を聴力に集中するため、作業前の休養および日常の体調管理に留意が必要。世界の大都市では10~30%といわれる漏水率が、東京都の場合はこれら熟練の方々の努力で3%に止まっている。東京都水道局では漏水調査の専門職員を養成する研修所をつくり、発見器を用い耳で聴くだけで漏水個所を判別する職人技の伝承に力を入れている。



電子式漏水発見器(写真左)と音聴棒(写真右)を使った
デモンストレーション

【第13回】2008年「音の匠」

2008年は、NTTの時報や番号案内、NTTドコモの留守番電話サービス、公共乗り物などのアナウンスにおいて、明瞭で親しみのある声で私たちの日常生活を支える、ナレーターの中村啓子氏を「音の匠」に選定。また、聴覚障害者のため体感音響システム

を使ったコンサート活動を長年に亘り続けている「身体で聴こう音楽会」事務局長の山下桜氏に「音の匠特別賞」を授与した。

顕彰者（1名）

●中村 啓子（なかむら けいこ）氏

電話案内や公共乗り物などのアナウンスで明瞭で親しみのある声で日常生活に貢献。

「音の匠特別賞」（顕彰者1名）

●山下 桜（やました さくら）氏

長年にわたる聴覚障害者のための体感音楽活動の推進について。

顕彰者プロフィール（2008年現在）

■中村 啓子氏（アナウンサー）

富山県生まれ。東京アナウンスアカデミー卒業。関東学院女子短期大学国文科卒業。ニッポン放送プロジェクト契約アナウンサー、TTB（大阪テレビタレントビューロー）所属を経て、俳協（東京俳優生活協同組合）所属、現在に至る。電話や公共乗りものなど、生活の中でどこかで聞き覚えのある声の主。NTTの時報（177）・番号案内（104）、NTTドコモの留守番電話サービス、銀行や郵便局のATM、東京モノレール・多摩都市モノレール・リムジンバスのアナウンス、駅などのエスカレーター・エレベーターの案内、テレビ・ラジオ番組・各種ビデオのナレーションなど。ビデオでは、特に「医療、医学、介護」等のジャンルで数多くの作品に携わる。レギュラー出演番組は、テレビ神奈川など



「音の匠」に授与される顕彰盾。顕彰者ゆかりのディスクを埋め込んだものである。なお、盾の「音の匠」の文字は元日本オーディオ協会会長中島平太郎氏の筆によるもの。この盾は中村啓子氏に贈呈されたもの。

UHF各局の『ハーベスト・タイム』。プロのためのナレーション・スクール「OKEIKO」主宰。三浦綾子読書会朗読部門講師、医療法人社団ホスピタム聖十字会中島医院の朗読ボランティアなど。『風が見た愛のおはなし』（ハーベスト・タイム）、『三浦綾子：病めるときも』（東京エーヴィセンター）など朗読CDも多い。

■山下 桜氏（「身体で聴こう音楽会」事務局長）

1993年パイオニア株式会社入社。2002年「身体で聴こう音楽会」事務局担当。2007年「身体で聴こう音楽会」の活動によって「メセナアワード2007」でメセナ大賞部門「体感音響賞」と「あなたが選ぶメセナ賞」を受賞。パイオニア株式会社総務部CSR推進室「身体で聴こう音楽会」事務局長。



「身体で聴こう音楽会」について

パイオニア株式会社の創業者、松本望氏の志「より多くの人に、より良い音を」をもとに、1992年7月から聴覚に障害者のための「音楽体験の場」として“体感音響システム”を使ったコンサート「身体で聴こう音楽会」を定期的に開催。この音楽会のきっかけは、ロケット工学で有名な糸川英夫博士の提言をヒントに、1972年に松本氏が自宅で体感音響システム“ボディソニック”の研究・開発に取り組んだことに遡る。骨伝導を利用することで聴覚障害者にも、音楽やリズムを楽しめるのではないかと考え、関係団体の協力のもと実現したのが始まり。以来、試行錯誤を重ね、聴覚障害者の方々に少しでも満足してもらえるよう機材や運営面での改良を加え、現在に至っている。

【第14回】2009年度「音の匠」

2009年は、最も古い音楽自動演奏機であるオルゴールをテーマに、アンティークオルゴールに関する

る優れた知識と修理技術で伝統の音を現代に継承する井上正二郎氏、大谷勲氏、大森裕武氏（順不同）の3人を「音の匠」として選定した。また、「オルゴールの小さな博物館」運営とメカニクの育成によって、アンティークオルゴールの啓発活動を支える名村義人氏に「音の匠特別功労賞」を授与した。

顕彰者（3名、順不同）

●井上 正二郎（いのうえ しょうじろう）氏

●大谷 勲（おおたに いさお）氏

●大森 裕武（おおもり ひろたけ）氏

オルゴールに対する卓越した知識と修理技術で貴重なアンティークオルゴールの保守とその伝統を現代に継承する技に対して。

「音の匠特別功労賞」（1名）

●名村 義人（なむら よしひと）氏

アンティークオルゴールの保守技術者の育成とその啓発活動に対して。

顕彰者プロフィール（順不同、2009年現在）

■井上 正二郎氏

（「オルゴールの小さな博物館」メカニック担当）

「オルゴールの小さな博物館」（東京都文京区）を含

め、約20年間アンティークオルゴールの修理を行なう。古典技術の復活を心がけ、オリジナルの音を再現するため部品、材料にも



こだわり、自ら部品の復元も行なう。「オルゴールの小さな博物館」が所有するシリンダータイプ、ディスクタイプオルゴール、自動ピアノ、ストリートオルガン等多種多様なカテゴリーの修理・修復作業を行い、昔の技術を今日に伝えている。

■大谷 勲氏

（オルゴールなどの修理全般「おでんせ」経営）

オルゴールや蓄音機などの修理全般を行っている「おでんせ」（神奈川県相模原市）を経営。オルゴール修理の草分け。1970年頃から



アンティーク時計類の本格的な修理に従事する。約100年前の音響機器の音を再現するため、使われている部品の復元から手がける。アンティーク時計はもとより、シリンダーオルゴール、ディスクオルゴールからオートマタまで幅広く、各地の博物館などからの依頼にその技で応えている。

■大森 裕武氏（オルゴール修理工房「ハイランドアンティーク」経営）

1978年頃アンティークオルゴールに出会い、メカと音楽の両要素を備えたオルゴールに引かれ修理の専門家となる。1985年頃から



オルゴール修理工房「ハイランドアンティーク」（神奈川県横須賀市）をかまえ活動。MBSI（Music Box Society International：国際オルゴール協会）日本支部を通じ、後継者の指導も積極的に行なっている。著書にオルゴール修理技術のバイブルともされている『オルゴール修理の実技』がある。

■名村 義人氏（オルゴールの蒐集家・研究家、「オルゴールの小さな博物館」館長）

1983年、自宅を開放し日本初のオルゴール博物館「オルゴールの小さな博物館」（東京都文京区）をスタート。18世紀末から20世紀のシリンダータイプ、ディスクタイプ、自動演奏オル



ガン、自動ピアノ、オートマタなど、全て動作品を展示(所蔵約400点)。またアンティークオルゴールについての啓発活動を積極的に行なっている。著書に『オルゴールの詩』(音楽の友社)、『たくさんのふしぎ——オルゴール誕生』など多数。CD製作も多い。

【第15回】2010年度「音の匠」

2010年は、活動弁士として多彩な語り口で人々に感動を与え、また後進の指導育成に貢献されている澤登翠氏を「音の匠」に選定した。

顕彰者(1名)

●澤登 翠(さわと みどり)氏

活動弁士として日本の伝統話芸を継承し多くの人々に感動を与え、また後進の指導育成への活動に対して。

顕彰者プロフィール

■澤登 翠氏(活動弁士)

東京都出身、法政大学文学部哲学科卒業。故松田春翠門下。日本を代表する活動弁士(活弁)として、国内はもとよりフランス、アメリカなど多くの海外公演を通じて、「活弁」の存在をアピールし高い評価を得ている。「伝統話芸・活弁」の継承者として、活弁を現代のエンターテインメントとしてよみがえらせ、文化庁芸術祭優秀賞など多くの賞を受賞している。的確な作品解釈による多彩な語り口で、これまでに500本以上のさまざまなジャンルの無声映画の活弁を務めている。



八に近い音色をもつ楽器「ノブレ管」を開発。小・中学生、初心者などに尺八本来の音色を体験してもらうことで、尺八の普及活動に努めている三橋貴風氏を「音の匠」に選定した。

顕彰者(1名)

●三橋 貴風(みつはし きふう)氏

独自の新技术で安価で優れた音の尺八を開発、若年者の尺八の普及に貢献した功績に対して。

顕彰者プロフィール

■三橋 貴風氏(尺八奏者)

1950年東京都出身。尺八琴古流を佐々木操風氏に、普化尺八古典本曲を岡本竹外氏に師事。普及用の合成樹脂製の尺八「NOBLE(ノブレ)管」を開発(特許取得)、琉球音楽のための新しい尺八[うちなー尺八]を開発(実用新案取得)など、楽器の開発にも熱心に取り組んでいる。邦楽啓発プロジェクト「デーモン閣下の邦楽維新Collaboration」をプロデュース展開中。国内外の交響楽団からのソリストとしての招聘も多く、また海外のリサイタルも120回を越え、日本文化の紹介、国際交流などにも大いに貢献している。受賞歴は、1980年、「三橋貴風第一回尺八リサイタル」で「文化庁芸術祭優秀賞」を受賞、その後も国内外で多くの賞を受賞。1992年には日本オーディオ協会の初代会長中島健蔵氏ゆかりの「第10回中島健蔵音楽賞」を受賞、2011年には紫綬褒章を受賞した。現在、琴古流尺八大師範。琴古流尺八貴風会家元。



【第16回】2011年度「音の匠」

2011年は、日本古来の尺八のさらなる普及のため、容易に入手可能な素材(水道用塩ビ管)に、新技术によるコーティング処理を施すことで竹製の尺